

昆虫園について^{*}

松田真平

1. 「昆虫園」の定義

「昆虫園」は「各種の生きた昆虫をその生息環境とともに展示、解説することを主体とした施設」と定義されている(駒井, 1991)。

「昆虫園」という言葉は、「動物園」という言葉と対置させて考えると、わかりやすい。例えばトラなどの動物を飼って公開しているのが動物園ならば、「チョウ」などのさまざまな昆虫を飼って生きた状態で公開している施設を昆虫園と呼ぶことができる。

屋内で昆虫を生きたまま展示する場合、古くからの「テラリウム式」(水槽、飼育ケースなどに入れる方式)と、新しい「パススルー式」の二つの方式があり、パススルー式というのは、全面ガラス張りの温室構造で、100～1,000m²以上の広さを持ち、大人の観客が普通に通り抜けられるような方式である。

日本で、このような本格的な昆虫飼育用の設備を持つ昆虫館は、全国昆虫施設連絡協議会に加盟しているものだけで31館(矢島, 2001)あり、生体展示発祥の地イギリスでは、50～100箇所、世界中で主だったものだけでも、500箇所くらいあるといわれている。北半球に多いが、南半球では、1985年にオーストラリア・メルボルンに造られたパススルー式のもののが最初といわれる(文献3)。

昆虫の中でも「チョウ」は誰の目にも美しく、トロピカルなムードただよう温室内をマダラチョウなどがゆるやかに飛んでいるようすなどは、展示効果もすばらしいので、チョウに限ってパススルー式で公開している施設を特に「バタフライガーデン」と呼ぶことがある。

2. 関西の昆虫園

関西には公営の昆虫館が現在3箇所あるが、1988年に東京の多摩動物公園に1100平方メートル以上の大きさがある本格的なパススルー式展示の昆虫生態園が日本で初めて完成し、その成功が全国に波及し、

関西でも次々このような生きたチョウの展示公開を行う温室が昆虫館の中に、つくられていくことになったらしい。

これから、それぞれの関西の昆虫館について、少しレポートしてみたい。

報告に先立ち、多くの資料をご恵送下さり有益なご教示を賜った駒井古実氏、昆虫館と博物館の違いについてご教示いただいた保田淑郎氏、小学校の教育について有益なご教示をいただいた矢野高広氏、現地で館内を御案内いただいた橿原市昆虫館の中谷康弘氏、関西の昆虫園の最近の歴史と傾向についてご教示いただいた同館の日比伸子氏、宝塚昆虫館の歴史についてご教示いただいた喜多舒彦氏と若林守男氏、文献を撮影させていただいた福貴正三氏、昭和30年代の文献の年代考証をしてくださった「ひかりのくに株式会社」の安藤憲志氏、最近の昆虫館の資料をご提供いただいた久保快哉氏に厚くお礼申し上げます。

A. 箕面公園昆虫館 所在地：大阪府箕面市箕面公園

大阪では、戦後まもなく(昭和28年)開館した、歴史の感じられる大阪府営の昆虫館である。昆虫の採集地として、古くから有名な箕面公園内にあり、もともと、昆虫の標本を体系的に数多く展示している博物館的な施設であった。収藏品には、平山修次郎氏のコレクションの一部も含まれている。1981年にリニューアルされ、近年チョウの温室(放蝶園)も完成した(写真1)。

放蝶園がつくられたのは1992年で、マダラチョウやシロチョウの仲間や、ギフチョウも飼育されており、春のギフチョウ羽化のシーズンには、展示用の水槽を使用したテラリウム方式で、生きたギフチョウが飛ぶ姿も見ることができ(写真2)、マスコミでもよくとりあげられている。

B. 伊丹市昆虫館 所在地：大阪府伊丹市昆陽池

伊丹(いたみ)の昆陽池(こやいけ)公園内にある。チョウの温室がつくられたのは1990年で、橿原市昆虫館の翌年にあたるが、広大な平面を一度に見渡せる大きな長方形の温室であり、面積は600m²で、関西で最も大きい。

コノハチョウやオオゴマダラ、イシガケチョウなどがたくさん飛んでいたことが、記憶にある。珍しいコノ

^{*} Matsuda, S.: Introduction of several Insectaria.

ハチョウの生態撮影には、なかなかすばらしいセッティングで、沖縄まで行かなくとも、ここで十分堪能できるわけである。

広い館内には、大きなハチの模型等が造られていて、観客向けの企画として優れており、子供達にも喜ばれているようだ。

C. 橿原市昆虫館 所在地：奈良県橿原市南山町

1989年に開館した奈良県橿原市の橿原市昆虫館は、現存の関西の昆虫館の中で一番最初に大きなバタフライガーデンを作った館として知られている。古代史の舞台の飛鳥の地、天の香具山のふもとの自然豊かな土地に建てられ、チョウの温室（放蝶温室）は、約500m²の広さで、最大15mの高さがある。

1月のある晴れた日に訪れたところ、ハイビスカスにツマベニチョウが舞い降りる絵のような風景と、滝のまわりにカバタテハやオオゴマダラが群がっている様子が観察できて大変感動した。温室にはハチドリも入れられているが、これは、チョウの温室として当館がオープンした3年後に、チョウと共存できる動物として、このハチドリが選ばれたことによる。かん高い声を出す小さく敏速な鳥であるが、茂みの中に「とり木」もあり、そこで観察することができる。

ホソオチョウやギフチョウも時期によっては放されているという。「Gonta」というA4判の昆虫館だよりが出ている。

2003年5月に再度当館を訪れ、学芸員の中谷氏に、通常の入場者には見せてもらえないような施設まで、丁寧にご案内いただいた。その時の写真も含めて、ここに掲げさせていただく（写真3～8）。



写真1：箕面公園昆虫館 後方の丸い建物がバススルー式のチョウの温室

3. 黎明期の昆虫園と、博物館の役割について

A. 宝塚昆虫館と豊島園昆虫館

宝塚昆虫館は、阪急電鉄が経営する、宝塚のファミリーランド内に昭和9年開館し、昭和42年まで存続していた昆虫館で、昆虫の室外でのテラリウム方式の生体展示（ジャコウアゲハ、クロアゲハ、ギフチョウなどのアゲハ類やルリタテハなど）を日本で最初に行った館として、先駆的な意味を持っている（写真9～11、文献2,4,6～8）。

屋外に大型の水槽を据え付け、そこに食草などを入れた、チョウの生態の展示が始まったのは、昭和29年（1954年）の10月頃のこと（文献2,3）、当時当館の学芸員であった福貴（ふくき）正三氏の功績が非常に大きいといわれる。なお、日本において最も早く本格的な室内のテラリウム方式の生体展示施設を建設した東京の豊島園（としまえん）昆虫館（創立者は矢島 稔氏）の開館が昭和31年（1956年）なので、規模と、室内・室外の違いはあるにせよ、宝塚の方が2年程早いことになり、こちらが室外でのテラリウム方式としては元祖といえる（写真10）。宝塚昆虫館は、閉館後建物も取り壊され、現在は面影も偲べない点、大変惜しまれるが、これは、公営ではない、企業経営の博物館であったことと、会社という利益集団にとっては、なかなか大きな収益は上がりにくい施設であったことが原因のようである。その後、関西では、公営の箕面、伊丹、橿原などの昆虫館で、多摩動物公園にならった大規模なバススルー式を採用したチョウの温室がつくられ、市民に親しまれていることは、先に述べた通りである。

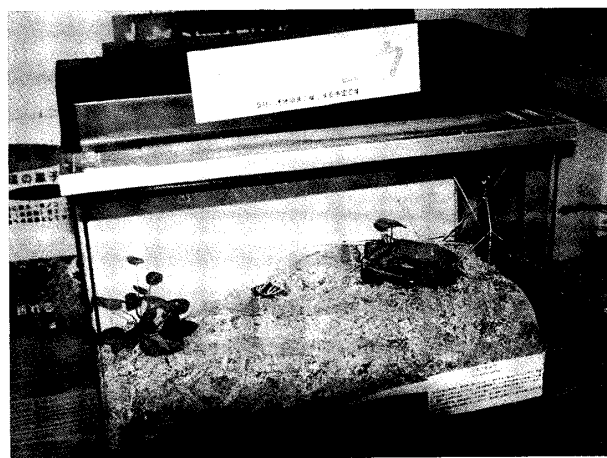


写真2：箕面公園昆虫館 ギフチョウのテラリウム式生体展示 2003年

名前	開館・閉館時期	昆虫生体展示
宝塚昆虫館(兵庫)	1934年開館 1967年閉館	1954年10月に屋外テラリウム式、1956年頃8m ² のチョウの温室(子供が入れる程度の大きさ)
豊島園昆虫館(東京)	1956年開館 1997年閉館・2003年再開	1956年に本格的な屋内テラリウム式
多摩動物公園昆虫館(東京)	1969年開館 (本館)	1961年に屋内テラリウム式の「蝶の温室」 1988年にパススルー式昆虫生態園(1100平方メートル)
箕面公園昆虫館(大阪)	1953年開館	1992年にパススルー式
橿原市昆虫館(奈良)	1989年開館	1889年にパススルー式 (500平方メートル)
伊丹市昆虫館(大阪)	1990年開館	1990年にパススルー式(600平方メートル)

(◆ テラリウム式展示の開始
 ● パススルー式展示の開始(基本的に500m²以上のもの)
 ※印の2館は博物館的な施設としてスタート

宝塚(兵庫) 1934開館 ※ 1954 1967閉館

豊島園(東京) 1956開館

多摩(東京) 1961チョウの温室開設 1988

箕面(大阪) 1953開館 ※ 1992(500平方メートル以下)

橿原(奈良) 1989開館

伊丹(大阪) 1990開館

1950 (昭和25年) 1960 (昭和35年) 1970 (昭和45年) 1980 (昭和55年) 1990 (平成1年)

表1 各地の昆虫館の「昆虫生体展示」開始時期
(参考資料: 文献8 など)

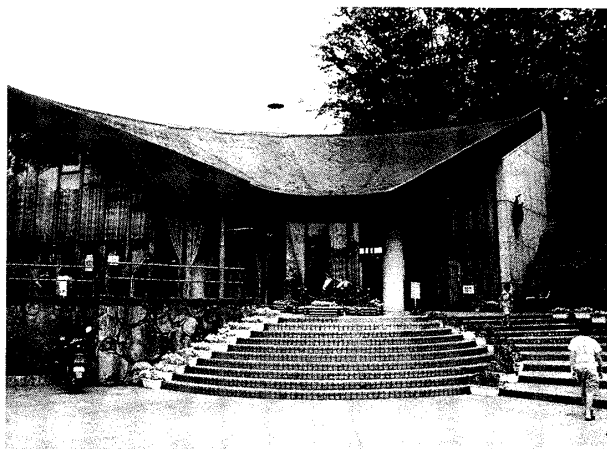


写真3: 橿原市昆虫館 外観 2003年



写真4: 橿原市昆虫館 マダラチョウの仲間に卵を生ませる
野外ケージ(円内はヘアペンシルを出すツマムラサキマダラ)

B. 篤志家の蝶類コレクションの流転について

宝塚昆虫館には、常に数多くの世界中の蝶などの昆虫標本が展示されていた。コレクションの中心となっていたのは、鈴木元次郎（もとじろう）氏、田中龍三氏、平山修次郎氏、大倉正文氏らのコレクションで、これらの管理と館全体の指揮、運営の責任者は、初代館長の戸沢信義氏であった。戸沢氏は、基本的には乾燥標本の展示を中心とする博物館的な発想で運営を行っていたように思われる。昭和 42 年の閉館時に、鈴木元次郎氏、田中龍三氏の標本は、散逸したともいわれるが、館長の戸沢氏の標本の貴重なタイプ（アオスジアゲハの異常型など）は、大阪市立自然史博物館に、平山修次郎氏の標本は一部、箕面の昆虫館にも入ったが、平山コレクションの主要な部分は兵庫県の千種（ちくさ）川グリーンライン昆虫館に多く収蔵されている。

C. 博物館と昆虫園のそれぞれの役割

博物館には乾燥標本の保存・研究と同時に一方で、公開・普及活動などの役割もあり、展示・普及・教育が 3 つの大きな柱である。生体展示をする昆虫園は、どうであろうか。一般に、「標本」は湿気を嫌うが、「生き物」は乾燥を嫌う。この相反する点が、両者の役割の根本的な違いとしてあげられる。動物園と同じレベルで考えてみると、チョウの温室を持つ昆虫館というものは、リクレーションや普及活動に占める割合が大ききようにも思われる。両者の良い部分を融合させたような展示方式が最近の「昆虫園」では試みられているようだが、「博物館」のような標本保存の完璧さを「昆虫園」に求めることは、職員

の仕事分担や時間配分の上でも無理があるだろう。やはり、「博物館」と「昆虫園」は、異なるものであり、一つの館内での両者の中途半端な融合はあまり望ましい事とはいえない。

4. 昆虫少年を復活させるには・・・

A. 里山の保全と利用について

もともと、昆虫園という施設は、都市近郊に良い野山が残っていない時に、教育上で大変重要な施設となりうるものである。橿原市昆虫館の学芸員の日比氏にお聞きしたところでは、「子供に昆虫に慣れ親しんでもらうには、昆虫館も、来館者を待つだけではなく、積極的に学校等にも出向いて、教育活動を行うようになってきており、里山で昆虫とふれあってもらう活動も積極的に行っている」という。採集したものを持ち帰ってよいかどうかという点は、正しい解答を出しにくく、やはり難問という。

小学校 3 年くらいの時に、虫好きになるよう、うまく教育すると、昆虫少年になりやすいという話をどこかで聞いたことがあるが、私自身が小学生だったころの経験を思い出して、なるほどと思ったことがある。義務教育そのもののカリキュラムに生かせないものだろうか。

30 年くらい前、小学 3 年の理科の教科書にモンシロチョウの飼育という教材があり、実際に飼育もした記憶があるが、教材について、矢野高広氏にご教示いただいたところによると、現在も小学 3 年の教



写真 5：橿原市昆虫館 オオゴマダラの生きた蛹の展示



写真 6：橿原市昆虫館 オオムラサキの飼育のため、昆虫館裏手のエノキの大木には巨大な袋がかけられていた。2003 年



写真7：橿原市昆虫館のスタッフ（蝶の飼育ケースの掃除と餌の入替作業）



写真8：橿原市昆虫館 オオゴマダラの食草「ホウライカガミ（キョウチクトウ科）」の栽培風景

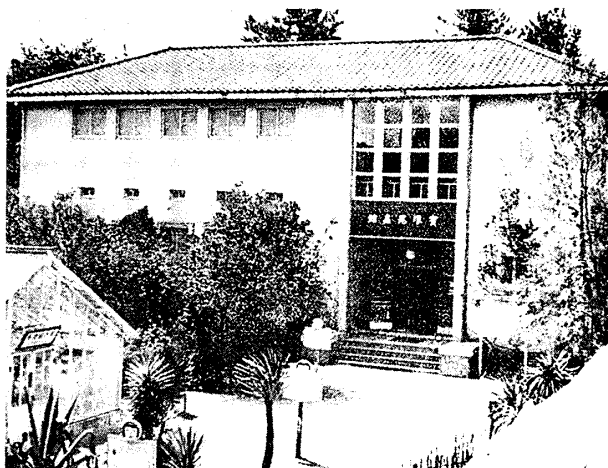
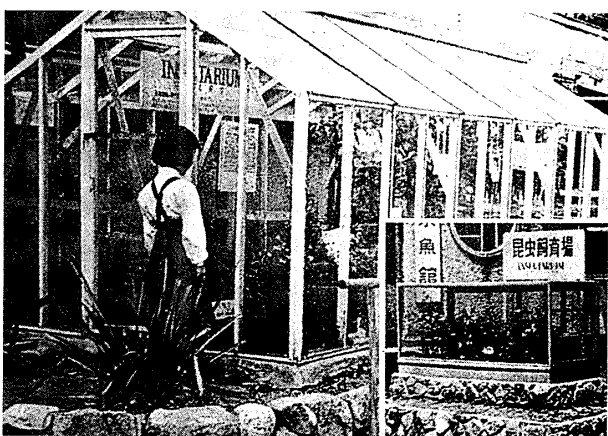


写真9：宝塚昆虫館（昭和30～40年頃），（文献5より）



テラリウム（宝塚昆虫館）
水陸両棲のこん虫を飼育するもの
水中の生活は下のガラスま
どから、水面の生活は上のガ
ラスを通して見られる
また、水辺にはヤナギなど
を植えて、コガネムシ、ハム
シなど甲虫の生態も観察でき
るようにつくってある。

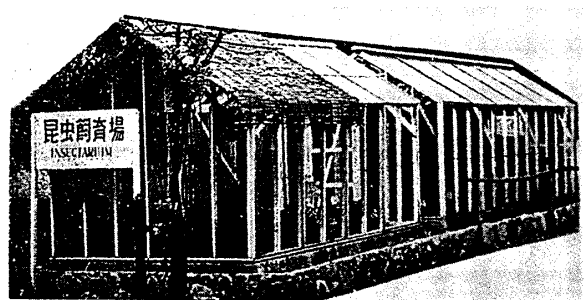
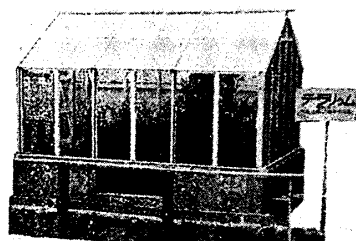


写真11：宝塚昆虫館の昆虫飼育場（昭和30～38年頃），（文献7より）

◀ 写真10：宝塚昆虫館の昆虫飼育場：屋外のテラリウム（右下）と、8m²の温室（昭和30～38年頃），（文献6より）

科書にチョウの飼育の教材は載っており、教科書会社によってモンシロチョウだったりアゲハだったりするが、他の昆虫を扱ったものでは、プールのヤゴを飼って羽化させるというのも、学校現場では流行っているそうである。さらに小学4年では季節による動植物の変化ということで、身近な環境を季節を通し

て調べていくようになるが、このように、小学3,4年頃の教育内容については、全体に昔のままの指導方針が守られているようである。

幼稚園児も含め、子どもに生き物を飼うこと自体「おもしろい！」と感じさせることができれば、もうしめたもので、それが昆虫少年を育てる最初のきっ

かけとなるだろう。もちろん、親が、この方面の子どもの関心の芽を摘まずに育てることも、大変重要な要素であることは言うまでもない。

B. メガネトリバネアゲハの生体輸入について

動物園に世界各国の動物がいるように、昆虫園で、世界各国のチョウやガが舞う日があるのであろうか。

かつて、カラフルなトリバネアゲハやモルフォを図鑑で見た時、それが実際に生きて飛んでいる姿をこの目ではっきり見てみたいという衝動に駆られた経験を、現在の多くの大人の虫屋は持っているだろう。美しいものはいつの時代にも人を惹き付けて止まないものである。

昨年より、メガネトリバネアゲハの生体輸入についての審議が、植物防疫所で本格的に始まったところだ。この審議の経過は「植物防疫所からのお知らせ」(<http://www.pps.go.jp/>)で随時公開されている。トリバネに限らず、日本に産する「キシタアゲハ」も、目に鮮やかなことで、子供の目も輝き、チョウ好きになるきっかけとなりやすい点、生体展示用の対象として大変すぐれているといえる。害虫としての繁殖の危険がほとんどないものは、昆虫愛好者を育てるという視点から、日本の昆虫園で自由に飛ばせることを許可するくらいの柔軟な姿勢が、現在の日本には必要ではないだろうか。

C. 児童教育と昆虫

児童教育においても、生きた昆虫にさわるといった行為は、生命というものに対する素朴な感動や、探究心、身近な自然への愛情といったものを、知らず知らず育てて行く効果があり、自然が失われてい

く今後の時代には、ますます重要なことである。

そのような現代が抱える問題を解決する試みの一つに、NHK やマスコミでも取り上げられている「ぐんま昆虫の森」がある。昔、身近にあった豊かな里山の環境をもう一度復元し、そこで自然や昆虫と直接触れ合えるような広大な森を整備してゆこうとするものである。これは大切な事業であり、将来義務教育の中へもどんどん組み込まれて行けば良いと思う。

文献：

1. 駒井古実, 1991. 「昆虫園」(Insectarium). 造園雑誌 55 (1) : 70-71.
2. 矢島 稔, 2001. 「日本に於ける昆虫の生態展示—昆虫館の役割と将来への展望—」. 動物園水族館雑誌 42 (2) : 31-38.
3. 多摩動物公園昆虫館 (編), 1988. 特集・昆虫生態園オープン. インセクタリウム 25 (6) : 2-53.
4. 法西定雄, 1954 (昭和 29 年 12 月). 宝塚に昆虫飼育場出現. 虫界速報 33 号 : .
5. 手塚治虫, 1996. 昆虫つれづれ草:308. 小学館, 東京.
6. 福貴正三 (編著), 1963 (頃). ひかりのくに 学習コンパクト図鑑第 3 巻昆虫 1 : 62. ひかりのくに株式会社, 大阪.
7. 福貴正三 (編著), 1963 (頃). ひかりのくに 学習コンパクト図鑑第 8 巻昆虫 2 : 47.
8. 矢島 稔, 2000. 謎とき昆虫記、NHK 人間講座 2000 年 7 月～9 月期 : 174-188、PHP 研究所.

(まつだ しんぺい)

〒545-0053 大阪市阿倍野区松崎町 3-6-32-322)

Bernard d'Abrera
Birdwing Butterflies of the World .new ed.
 ダブレラ著『世界のトリバネチョウ』新版

井上寛, 杉繁郎, 黒子浩, 森内茂, 川辺湛 & 大和田守著
『日本産蛾類大図鑑 全 2 巻』 第 4 刷

<http://www.insectbook.com>

(有)バウアー アンド サトウ ジャパン (略称: BSJ) 〒157-8691 成城郵便局私書箱 26 号
 TEL: 03-5758-8590 FAX: 03-5758-8591 email: info@insectbook.com